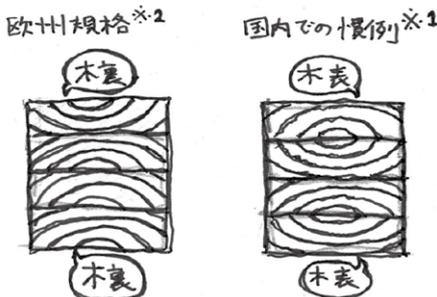


図1 ウッドデッキにおいて表面が『木表』だと...



※1: JASに積層方法の規定はない (各メーカーに任されている)
 ※2: 各種材の積層についての記載はない

図2 欧州規格における集成材の積層方法

学生さんに、「板材を使用するときに『木表』と『木裏』のどちらを表面側にすればよいのか」と聞かれたことがあります。この誌面ではその回答について考えてみたいと思います。

●ウッドデッキの例

降雨後に学校内のウッドデッキに目をやると、所々に水溜まりができています。これは、デッキに使用した板材が乾燥収縮によって凹状に変形する... (図1)。

●集成材の例

持ちの製材に比べて乾燥による割れが生じにくいとされているのですが、冬季に暖房を稼働させた場合、室内の相対湿度が著しく低下するため、しばしば乾燥による割れが生じてしまいます。こうした割れは、ラミナの積層方法によって発生状況が異なることが分かってきています。具体的には、最外層の表面を『木裏』側にし、各ラミナの『木裏』同士の接着を避けることで割れを抑えることができます。実際に、集成材の欧州規格などでは図2に示すような積層方法が規定されています。

●『木裏』は万能か

では、すべての場面において『木裏』を表面にした方がいいかということ、そうは言いきれません。美観の点から言えば、随分近から得られた板材の木裏側には「流れ節」が多く現れてしまいます。また、カラマツのような早晩材密度差が大きい樹

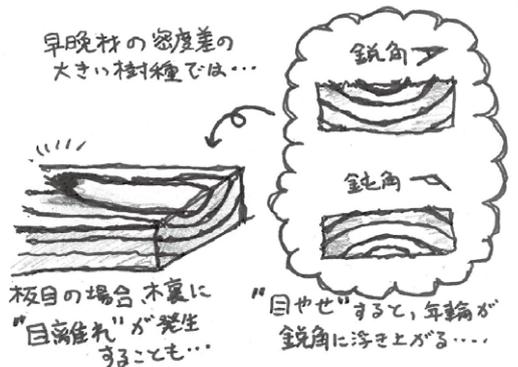


図3 『木裏』の注意点

種では「目離れ」が生じやすくなり(図3)、使用場所によっては注意が必要ですが(もともと、「目離れ」の生じやすさは、プレーナー掛けにおける刃物の摩耗程度にも影響を受けるとされています)。

●表と裏、両面の心がけ
 実のところ、「『木表』と『木裏』のどちらを表面側にすればよいのか」という問いに対して、決定的な回答はありません。使用環境、目的、樹種によってその答えが変わるからです。かの加藤清正は「表と裏、両面の心がけ、どれもおろそかにしてはならぬ」という名言を残しています。もちろん、これは木材を想定して残した言葉ではないでしょうが、それぞれの性質についてよく理解して、使い分けをしていくことが重要でしょう。